

タイトル	歴史教科書の中の多「人種」シンガポール：歴史教科書は民族的多様性をいかに描いたか
著者	坂口，可奈；SAKAGUCHI，Kana
引用	北海商科大学論集，12(1)：23-41
発行日	2023-02-20

歴史教科書の中の多「人種」シンガポール
—歴史教科書は民族的多様性をいかに描いたか—
Multi-racial Singapore in history textbooks
: How did Singapore's history textbooks describe its ethnic diversity?

坂口 可奈 SAKAGUCHI, Kana

要旨

シンガポールは多民族国家として知られる。では、その多民族国家としてのイメージはいかにシンガポール国内で教えられてきたのか。本研究では、歴史教科書に描かれた多民族国家としてのシンガポールの自国像の変容とその意味を明らかにする。そのために1999年から2015年に発行された中学校の歴史教科書における民族的多様性の記述及び「人種」問題についての記述を分析した。その結果、民族的多様性の描写及び民族的多様性に対する認識が時代によって変化してきたことが明らかになった。更に、本研究は、この変化がシンガポール政府の望む自国像の変化を反映したものであるとともに、移民の流入で増大する民族的多様性への対応策としても使われたことを指摘した。

キーワード

国家イメージ、教科書、民族的多様性、シンガポール、国家建設

Abstract

Singapore is considered as a peaceful multi-racial nation comprising of four races; Chinese, Malay, Indian, and Others. How has this multi-racial image of the country been disseminated among students via history textbooks? This study examined the transformation of Singapore's self-image as a multi-racial nation by exploring various descriptions of ethnic diversity and racial issues, in history textbooks published from 1999 to 2015. Consequently, the study revealed that the latest textbook described and admired richer ethnic diversity than previous textbooks did. This suggests that Singapore's self-image changed from a multi-racial one to an ethnically more diverse one. The study also reveals that the government used history textbooks to facilitate young people's adaptation to a globalized Singapore which is characterized by an increasing diversity.

Keywords: nation image, textbooks, ethnic diversity, Singapore, nation building

1. はじめに

シンガポールは華人(74%)、マレー人(14%)、インド人(9%)、その他(3%) (Chinese, Malay, Indian, Others/以下 CMIO¹) の「人種 (race²)」からなる人口約 569 万人 (うちシンガポール人と永住者は 404 万人) の多民族国家である (Department of Statistics Singapore 2021a: 4,7)。この CMIO カテゴリは公的な枠組みとして使用されており、国勢調査でも華人、マレー人、インド人、その他の分類が用いられる。そして、それぞれの「人種」の母語とされるマンダリン³、マレー語、タミル語、そして英語の 4 つが公用語とされている。この 4 言語のうち英語は特別な地位をもち、共通語及び教育言語として使われている⁴。

シンガポールでは、この CMIO からなる民族的多様性は自国を発展させるための観光資源としても活用されてきた。シンガポール観光局の公式旅行ガイドサイトである VisitSingapore.com でも「シンガポールの多種多様な文化と人種。これらが巧みに融合し、活気溢れる独自の文化を生み出しています。」(シンガポール観光局 2022)とされているし、過去の観光政策も CMIO 文化を観光資源として扱ってきた(Chang, T.C. 1997, Henderson 2018)。シンガポールは、CMIO が平和的に共存する多民族国家というイメージを観光政策を通じて対外的に宣伝してきた。いわば、CMIO が平和的に共存する国とのイメージはシンガポール政府が対外的に広めたいと望む自国像の一面なのである。

しかし、対外的に広めようとしたイメージが国内の人々に共有されていない場合、そのイメージは簡単に崩壊するだろう。それゆえ、国家は教育を通して国民に自国について教えるのである。そこで、本稿では歴史教科書の記述を紐解くことで、シンガポールの教育現場で多民族国家としてのシンガポール像がいかに教えられてきたか、そしてそれがいかに変化してきたかを明らかにしていきたい。

シンガポールの歴史教科書における多民族国家像は研究者たちの関心を引いてこなかった。歴史教科書を分析対象とした研究の多くは、与党人民行動党 (People's Action Party/以下 PAP) の正統性維持や強化の道具としての機能に関心を抱いてきたからである (たとえば Lee, M. H. 2015, Chia 2015)。歴史教科書研究で「人種」や民族的多様性に関する自国像を扱った数少ない研究として、Barr (2022) の研究がある。彼は歴史教科書の形成過程と記述内容を分析し、歴史教科書ではシンガポールのマレー性が覆い隠されてきたことを明らかにしている。そして、ラッフルズ上陸を歴史の始まりとして自国民を等しく移民の子孫とすることは、マレー人の先住性を薄めるものであるとする。Abdullah (2017)の研究は歴史教科書に限定したものではないが、シンガポールの歴史の語りの中で古代シンガポールのマレー性は意図的に強調されてこなかったと指摘する。

Barr や Abdullah が明らかにした多民族国家シンガポール像は、マレー性が弱められた華人中心の多民族国家というものであろう。しかし、彼らの研究も歴史教科書の中で描かれた多民族国家としての自国像が十分に明らかにしたとはいえないだろう。華人とマレー人という「人種」を中心に分析が進められているためである。シンガポールの民族的多様性は CMIO に限られるものではない。植民地時代にはより多様な民族集団が人々の間でも植民地政府にも認知されていた (Hirschman 1987, PuruShotam 1998)。例えば、現在はマレー

人としてくられるブギス人やジャワ人はそれぞれ別のコミュニティとして扱われていたのだ。しかし、独立後の国家建設の試みのなかで、PAPは、多様な集団に分かれていた人々をC・M・I・Oそれぞれに統合する形で、CMIOを基礎とする多「人種」国家をつくりあげてきた(坂口 2017)。いわば、CMIOを基礎とする多「人種」国家シンガポール像は、PAPの望むシンガポールの姿なのである。であればこそ、多民族国家としてのシンガポール像を明らかにするためには、「人種」内の多様性に関する記述にも注目し、それらがいかに描かれてきたか(もしくは描かれなかったか)をも明らかにする必要があるだろう。

さらに、民族的多様性に対する評価や認識も考慮に入れる必要がある。この評価や認識が自国イメージ形成にも影響するからだ。シンガポールはCMIOが平和的に共存する国とのイメージを外国に広め、さらに自国の誇りともしている。しかし一方で「人種」に関する問題はセンシティブなものとして、政府も「人種」間の不和が起こらないように警戒している。この点をかんがみると、教科書内で民族的多様性がいかなる評価・認識のもとで教えられてきたかを明らかにする必要があるだろう。

そこで本稿では、歴史教科書におけるCMIO内の多様性に関する記述と「人種」問題の記述にも注目する。本稿で扱う「人種」問題の例は、ともに独立前のシンガポールを揺るがすこととなったマリア・ヘルトフ事件及び1964年「人種」暴動である。マリア・ヘルトフ事件は、宗教的・民族的アイデンティティによって引きこされる危険への注意喚起をするために政府がしばしば使う事件である(Barr 2018:21)。そして、1964年「人種」暴動は、シンガポールの公的な言説では、民族的・宗教的な自民族中心主義の危険性を表すものとされている(Barr 2018:22)。この2つは、民族対立が引き起こす帰結を学ばせるための教訓として現代でも使われる事件である。

シンガポールにおける歴史科目の位置づけは1997年以後大きく変化した。この年、ナショナル・エデュケーションと呼ばれる教育プログラムがはじまったのだ。これは、若い世代が自国の歴史に無知であるとの指導者たちの懸念から始まった包括的な国民形成プログラムである。このナショナル・エデュケーションのもとで歴史教育の国民形成における機能が見直され、学校だけでなく記念日などを通して、いわば国家公認の歴史が教えられるようになった(Chia 2015:135)。

ナショナル・エデュケーション以降のシンガポールでは、教育省による教科書を通して生徒たちに国家公認の歴史が教えられることとなった。この国家公認の歴史のなかで教えられてきた多民族国家としてのシンガポール像を最も直接的にあらわすものがセコンダリー・スクール⁵の教科書である。生徒たちはプライマリー・スクールの社会科(Social Studies)の一部として自国の歴史に触れるが、あくまでも歴史教科として自国の過去について詳しく教えられるのはセコンダリー・スクール以降となる。一方、セコンダリー後の進路は多岐にわたり⁶、セコンダリー後の教育機関ではそれぞれのカリキュラムも教育目的も異なる。それゆえ、本論ではセコンダリー・スクールの歴史教科書を取り上げる。

ここでとりあげる教科書は、1997年以降に教育省のカリキュラム計画開発部門(Curriculum Planning & Development Division/以下CPDD)が発行した3つの歴史教科書

である。まず、1999年に発行され2000年からセコンダリー・スクールで使用された258頁の歴史教科書(*Understanding Our Past – Singapore: from Colony to Nation*)を分析する。この教科書は、まさにナショナル・エデュケーションの申し子とも言える。2つ目として、236頁の分量をもつ *Singapore – From Settlement to Nation Pre-1819 to 1971* を取り上げる。この教科書は2007年に発行され、その翌年から教育現場で使用された。3つ目の教科書は2冊組の *Singapore: The making of a Nation – State, 1300-1975* である。2014年に発行されたセコンダリー1用が199頁、2015年に発行されたセコンダリー2用も199頁の分量を持つ。次章以下では独立前のシンガポールの歴史を確認したのち、多民族国家としてのシンガポール像とその変容を明らかにしていきたい。

2. シンガポールという国

本章では独立前のシンガポールの状況と本稿で扱う事件を概観しよう。マレー年代記には、シンガポールという国名の由来を示すエピソードがある。シュリーヴィジャヤの王子サン・ニラ・ウタマは、ある島で、素早く動き、美しく、そして赤い胴体と黒い頭部に白い胸部を持つ動物を見つけた。王子が従者にその動物について尋ねたところ、従者はシンハー(ライオンの意味)だと答えた。それゆえ、彼はその島をシンガプーラ(獅子の街の意)と名付け、その島を治めることとなった(Leyden 1821:43-44)。これがシンガポールの名前の由来である。

サン・ニラ・ウタマは13世紀末から14世紀にかけてシンガポールを治めた人物だとされる。現代のシンガポールにはこの時代のシンガポールの姿を示す遺跡は残ってはいないものの、13-14世紀末から16世紀には活気にあふれた港市がシンガポールに存在していたことが明らかになっている(Kwa et al. 2019:27)。しかし、シンガプーラ期のシンガポールについては不明なことが多かったこともあり、2000年代半ばまでの歴史教科書では多くは語られなかった。かわりに、ラッフルズ上陸がシンガポールのはじまりだとされていた。

1819年、イギリス東インド会社のトーマス・スタンフォード・ラッフルズがシンガポールに上陸した。そして彼は、当時この島を治めていたジョホールのスルタンから、貿易拠点を作る許可を得る。その後、ヨーロッパからインドを経て中国に至る東西を結ぶ航路上に位置するシンガポールは貿易の要所として発展していった。それゆえ、中国南部、マレー半島や現在のインドネシア、南アジア、アラビア半島にヨーロッパ、そして日本からも多くの人々がシンガポールを目指した。この時期の人の移動が現代シンガポールの民族的多様性の基礎を作ったといえる。

戦争が始まるとシンガポールは日本軍に占領され、1942年から1945年に至るまで日本軍の軍政下におかれる。第二次世界大戦後はイギリス植民地に戻るものの、戦後のシンガポールはまさに激動の時代を経験する。1940年代後半、労働組合を影響下においたマラヤ共産党は、ストライキによって社会に自らの主張を訴えようとしていた。都市革命が成功しないことがわかると、彼らは武力革命を試みるようになる。そのため、イギリスは1948年にマラヤ非常事態を宣言し、その1週間後にシンガポールでも同宣言を発令した(Turnbull

2009:240)。1950年代半ばになると、共産党は再び労働組合を通じた活動を活発化させる。この時期のストライキや暴動には若い学生たちも参加していた。1954年には、徴兵年齢にあった学生⁸の徴兵を卒業まで自動的に延期するように求めた反徴兵制暴動が起きる(Barr 2018:21)。1955年には、運転士たちの労働条件をめぐる交渉の失敗からホック・リー・バス暴動が発生した。そして1956年には、シンガポール華人中学学生同盟(Singapore Chinese Middle School Students' Union)が共産党とのつながりによって解散を命じられたことをきっかけとして暴動が起きた。

さらに、相互理解の欠如からなる「人種」間の不和も目立っていた。1950年にはマリア・ヘルトフ事件が起きる。マリア・ヘルトフ事件とは、あるマレー人女性の養女として育ったオランダ人少女の養育と結婚をめぐる判決をきっかけにして起こった暴動である。第二次世界大戦中、マリア・ヘルトフというオランダ人の少女がチェ・アミナというマレー人女性に預けられ、イスラム教徒として育てられていた。戦後、実母がマリアを引き取ろうとしたところ、養母との間で養育権をめぐる争いとなってしまった。一度は養母の養育権が認められたものの、マリアが結婚すると状況は変化した。イスラム法のもとではマリアは成人とみなされていたし、本人も結婚に合意していた。しかし、実の両親はこの結婚に反対していた。それゆえ裁判所はマリアの結婚を認めなかった。更に、マリアのイスラム教への改宗も父親の許可がないために無効だとしたのだ(Colony of Singapore 1951:8)。これがイスラム教徒の反発と不満を引き起こし、暴動が起こってしまう。この暴動の結果、18人が死亡し、170人以上の負傷者が出る事態となった(Colony of Singapore 1951:1)。

マリア・ヘルトフ事件と並ぶシンガポールの「人種」関連の事件として、1964年におきた華人とマレー人との暴力を伴う「人種」対立があげられる。1959年に自治権を獲得したシンガポールは、1963年にはマラヤ、そして現在の東マレーシアに位置するサバやサラワクと共にマレーシアを成立させていた。しかし、マラヤのマレー人政党の統一マレー国民組織(United Malays National Organisation/以下 UMNO)と PAP は政治的に対立関係にあった。PAP が「人種」の平等を訴える一方で、UMNO の一部の政治家は PAP がマレー人を冷遇しているとの批判を繰り返していた。更に、当時のシンガポールでは「人種」間の交流は少なく、相互理解に欠けていた。この緊張状態のなか、1964年6月のムハンマド生誕祭での警官と群衆の間の対立をきっかけとして、シンガポール全土におよぶ華人とマレー人との「人種」暴動が起こってしまう。一度はおさまったものの、9月には二度目の暴動が発生する。この暴動は、「シンガポールは人種寛容を自らの誇りにしていたが、それが歴史上はじめて脅かされた」(Turnbull 2009:291)事件であった。

このように、植民地期のシンガポールは中国、インド、マレー半島や現在のインドネシア、中東やヨーロッパなど世界各地から様々な人々が集まっていた。そして、独立前のシンガポールでは「人種」問題に端を発する暴動も起きていた。では、シンガポールの教科書はこの民族的多様性と「人種」問題をいかに描写してきたのか。次章以下、1999年から2015年のセコンダリー・スクールの教科書における記述をみていこう。

3. 1999年教科書 *Understanding Our Past – Singapore: from Colony to Nation*

3-1 シンガポールのはじまり

この教科書は、ラッフルズがジョホールのスルタンと条約を交わした日である1819年2月6日の描写から始まる(CPDD 1999:4)。この日の条約によって、シンガポールにイギリスの貿易拠点を作られることになった。ラッフルズ上陸を自国の歴史の始まりとしたことは、シンガポールの名づけ親とされるサン・ニラ・ウタマやシンガプーラ時代—すなわちマレー世界の一部としてのシンガポールの歴史—を自国の歴史の一部として扱わなかったことを意味する。

この理由は2つある。1つは、シンガプーラ時代についての学術的調査が進んでいなかったためである。遺物は発掘されていたものの、教科書に記述するには更なる時間と調査が必要だった。そのため、1999年教科書は13世紀からのシンガプーラ時代の記述を章末の *Taking a Closer Look* にまとめ、あくまでも主要な情報ではないものとして扱っていた(Blackburn and Wu 2019:154, CPDD 1999:13-16)。2つ目には、自国の歴史を周辺諸国から切り離し、マレーの歴史的なルーツを希薄化させるPAPの思惑がある(Abdullah 2017:6)。Barrは、この植民地前のシンガポールの排除は自国のマレー性を弱め、国内のマレー人の勢力が強くなることを防ぐためだったと主張する(Barr 2022:351)。学術的背景のみならず「人種」に関する政治的背景が教科書における「シンガポールのはじまりの時期」に影響したのである。

3-2 CMIO内の多様性

1999年教科書は地図を用いて初期のシンガポールに移り住んだ人々の出身地を説明する。ここでは中国から移住した人々のほとんどが中国南部の省出身だったことを示し、福建省からは福建人、広東省からは広東人と潮州人、客家、そして海南島からは海南人が移住したことを教える(CPDD 1999:19)。

マレー人に関しては、マレー半島、スマトラ、リアウ・リング諸島から移住したと説明される。さらに、ジャワ人やバウエアン人、ブギス人もまたシンガポールに移住したことが書かれた(CPDD 1999:19)。歴史におけるマレー性の希薄化はこのシンガポール人の祖先の記述にも見られる。シンガポールはマレー世界の一部であり、マレー人はそこの「先住者」であったにも拘わらず、マレー人も移民としてシンガポールにやってきた人々だと描いたからだ(Barr 2022:359-360)。

インド人については、マドラスやネガパタムといった南インドのタミル人が多かったと説明する。他にはセイロンから移住したタミル人とシンハラ人、更に北インド出身者として、パンジャブ地方からのパンジャブ人とシク教徒、ベンガル地方からのベンガル人、グジャラート州からのグジャラーティ、ボンベイからのパールシーの名があげられた。さらにこの教科書はインド人の一部がイスラム教徒であったことも示す(CPDD 1999:19)。

また、イギリス、ポルトガル、ドイツからのヨーロッパ人やアラビア半島からのアラブ人もシンガポールを構成する人々であるとされた(CPDD 1999:19)。

ユーラシアンやプラナカン⁹には触れられなかったものの、出身地を説明するページでは CMIO 内の多様性が明記されている。しかしながら、このページで示された CMIO 内の多様性は、その他のページではほぼ扱われない。植民地期シンガポールの人々の生活を扱う 2 章と 3 章の中で CMIO 内の多様性を示す単語が明記された例は、海峡華人(Peranakans /Straits Chinese)¹⁰ とシク教徒(Sikh)だけであった。ここでは、海峡華人が仲介人として活躍していたとの記述(CPDD 1999: 25-26)と、タン・トクセンなどの著名な海峡華人(CPDD 1999: 28-29)が紹介されたに留まる。華人と同様に豊かな多様性を持つインド人は、シク教徒が警官として働いていたことが言及されたに留まる(CPDD 1999: 28)。また、23 ページのラッフルズによる都市計画図では、ブギス人居住地(Bugis Kampong)や チュリア・カンポン(Chulia Kampong)として居住地名 が載せられているものの、教科書の本文で植民地期シンガポールにおけるブギス人やチュリアについて説明されることはなかった(CPDD 1999:23)。1999 年教科書において、植民地時代の人々の生活を説明するときには華人、マレー人、インド人、ヨーロッパ人(Chinese, Malay, Indian, European)との単語が使用され、その内部の多様性にはほぼ触れられていなかったのである。

3-3 マリア・ヘルトフ事件と 1964 年「人種」暴動

1999 年教科書はマリア・ヘルトフ事件を以下のように説明する。イスラム法に従ったマリアの結婚について裁判所は「イギリス法はマリアを既婚とはみなさない」(CPDD 1999:140)とした。その理由はマリアが低年齢であること、実の父親の同意が得られていないことであった。そして、マリアはカトリック修道院に送られることになる。この裁判所の判断によって「ムスリム・コミュニティは、イスラム法が尊重もされず、考慮もされていなかったと感じた」(CPDD 1999:140)。裁判所が養母によるマリアの養育権の要求を却下した時、「多くのシンガポール・ムスリムは、イギリスがオランダ側についたとして、裏切られたと感じた」(CPDD 1999:140)。そして、「12 月 11 日の最終判決が下されると、最高裁の外のパダンで待っていた主にマレー人からなる群衆が暴動を始めた」「多くのヨーロッパ人が襲われた。彼らがマリアの現状に責任があると信じられていたからである」(CPDD 1999:140)。

この教科書が描くマリア・ヘルトフ事件は、養育権をめぐる法的な争いや若い少女の結婚問題ではない。「この時期はお互いの文化や習慣を理解しようとしないう人種間緊張の時期として特徴づけられる」(CPDD 1999:142)とされるように、マリア・ヘルトフ事件をイギリスによるイスラム教やマレーの習慣への無理解と尊重の欠如の結果であったとする。それゆえ、「マリア・ヘルトフ事件は他の人種の文化や習慣を学ぶことの重要性を示している」(CPDD 1999:142)として、1999 年教科書は多様性を抱える社会には文化の尊重と理解が不可欠だとの教訓を与える。

では、1964 年「人種」暴動はいかに描かれたのか。ここでまず注目すべきは、記述の量である。1999 年教科書は 1964 年の「人種」暴動に 2.5 ページに渡る 1 セクションを割いて説明する。このことは 1999 年当時のシンガポールではこの暴動が重要な教訓的出来事と

して扱われていたことを示していよう。

記述内容をみてみよう。1999年教科書が描く「人種」暴動は以下の通りである。ムハンマドの誕生日を祝う行列がゲイランに向かっていた時、「警官が列を外れていたグループに対し、列に戻るよう指示した。そのグループは、指示に従う代わりに警官を襲った」(CPDD 1999:189)。警官襲撃後、他のグループも「規律を失い、華人の通行人や見物人を襲った。すぐに、シンガポールの異なる地域でもマレー人と華人の衝突が報告された」(CPDD 1999:189)。戒厳令とリーダー達の働きかけもあって一時は混乱が収まったが、「人種」暴動は9月に再発生した。「57才のマレー人の人力車夫がゲイラン・セライで殺されているのが見つかり、犯人は華人のグループだとされた。これは2度目の人種暴動を引きこし、戒厳令が発令された」(CPDD 1999:190)。さらに、2つの暴動合わせての死傷者数(死者36名、負傷者560名)が明記される(CPDD 1999:190)。

1999年教科書は、「人種」暴動が「シンガポールの平和と調和がいかに簡単に崩れてしまうかを示した」(CPDD 1999:190)とする。ここに、民族的多様性が潜在的に危険なものであるとの認識が示されている。この「人種」暴動は、「人種」間及び宗教間調和の重要性を教えるための教訓として教育現場で使われたのである(Blackburn and Wu 2019:153)。

しかし同時に、民族的多様性の潜在的危険性を抑制する方法も示される。1964年「人種」暴動が壊滅的被害をもたらさなかった理由として、戒厳令や治安維持部隊の他に、「決定的な要因は、隣人間の親善である。このことはマレー人が華人をカンポンにかくまったり、華人がマレー人を自分の地域にかくまったりしたときに証明された」¹¹(CPDD 1999:190)とのリー・クアンユーの発言が引用された。さらに、(結果として9月の暴動を防ぐことはできなかったが)、友好委員会が設立されたことが教えられる。友好委員会とは、それぞれの「人種」のコミュニティ・リーダーたちが住民の恐怖や懸念を取り除き、「人種」間調和を回復するための試みである(CPDD 1999:189)。このように、草の根レベルでの「人種」間の助け合いと協力が多「人種」国家シンガポールの安定をもたらすと教科書は教える。この目的は、シンガポールがCMIOに基づく多「人種」国家であることを国民に教え込み、「人種」間の不和があると国家全体が揺らぐと国民に警告することにあつた。

3-4 小結

シンガポールの歴史教科書はシンガプーラ時代のマレー国家としてのシンガポールを自国の歴史から排除し、更にマレー人を「移民」とすることで自国のマレー性を希薄化させてきた(Barr 2022)。それは1999年教科書も例外ではない。そして、この教科書は「人種」内の多様性にはほとんど触れず、自国の多様性をCMIOの4つであるかのように記述する。いうなれば、この教科書で描かれたシンガポールは、多民族国家というよりもCMIOからなる多「人種」国家なのである。

そして、この教科書は自国を混乱させたマリア・ヘルトフ事件と1964年「人種」暴動を「人種」間の相互無理解による不和の結末と位置付ける。1999年教科書は、子供達に「人種」間不和はシンガポール社会に甚大な被害を与えかねず、さらには国家としての生き残り

を脅かしかねないとの警告を与える。さらに、1999年教科書は、「シンガポール社会は、異なった言語を話し、異なった宗教を信じる異なった人種によって構成されている。これが、1959年の段階での国家建設を困難にさせた」(CPDD 1999:204)として、多様性は国家建設を困難にするものだとの認識が示す。当時のシンガポールにとって民族的多様性は資源である以上に、潜在的な脅威であり、管理すべき対象であったといえよう¹²。

4. 2007年教科書 *Singapore – From Settlement to Nation Pre 1819 to 1971*

4-1 シンガポールのはじまり

この教科書はサン・ニラ・ウタマのシンガポール命名物語からはじまる(CPDD 2007:2)。そして、シンガプーラ時代のシンガポールと世界とのつながりを学術的根拠を基に示す(Blakburn and Wu 2019:154)。たとえば、第1章は1999年版でも示された中国からの陶磁器の写真に加え、タイでつくられた陶磁器の写真も掲載して、シンガポールがそれらの国々と交易を行っていたことを示している(CPDD 2007:2-19)。この第1章の記述は、マレー世界の一部としてのシンガポールの歴史を示したものである。これは、自国の歴史のはじまりをイギリス以前にまで遡って記すことで、マレー性の希薄化をわずかに弱めるものであったといえよう。この点が1999年版からの大きな変化であった。

4-2 CMIO内の多様性

1999年教科書との違いはCMIO内の多様性の記述にも見られる。1999年教科書に比べると、2007年教科書はCMIO内の多様性への注目度は高いといえる。まず、人々の出身地に注目しよう。この教科書も植民地期シンガポールに移住した人々の出身地を地図を用いて説明する。中国出身者とマレー諸島出身者についての記述に変化はみられず、2007年教科書でもマレー人は「移民」とみなされている。インド出身者の記述も「インドとセイロンから」としてセイロンが追加された点と出身地方の名が削除された点以外の変化はない。ヨーロッパからの人々に関しては、1999年版で名前が挙がっていたドイツの代わりにオランダが追加されていた。アラブ半島出身者については、イエメン出身者がほとんどであったとの説明が追加された(CPDD 2007:42)。

出身地の説明における大きな変化はプラナカンの出身地としてマラッカとペナンが追加された点である。「マラッカとペナンからの移民は、海峡華人と呼ばれた。彼らはプラナカンとしても知られている。有名な海峡華人はタン・キムセンで、マクリッチ貯水池を作るのに貢献したことで知られるビジネスマンである」(CPDD 2007:42)として、彼らを中国大陸からの移民たちとは明確に区別したのである。

さらに植民地時代の人々の生活の記述にも変化が見られる。華人の方言集団についての記述が追加され、華人内の多様性が明確化されたのだ。チャイナタウン内でも方言集団によって居住区域が異なっていたこと、そして華人の秘密結社が方言集団別に形成されていたことが記される(CPDD 2007:43-44, 63)。マレー人内の民族的多様性についても、ブギス人の村の写真が追加された¹³(CPDD 2007:45)。

このように、2007年版では、1999年版よりもCMIO内の多様性の記述がわずかに増加している。とはいえ、全体的にはCMIOの枠組みの中での説明に留まる点は否定できない。1999年版と同様に、2007年版はCMIOからなる多「人種」国家シンガポールの歴史を記したといえよう。

4-3 マリア・ヘルトフ事件と「人種」暴動

では、「人種」に関連する事件はいかに書かれたのか。2007年教科書はマリア・ヘルトフ事件を異文化への無理解と尊重の欠如、そしてその結果としてのイギリス対する不満の高まりとして書く。それゆえ、2007年教科書は、ムスリム法の下でのマリアの結婚を無効だとする判決は「ムスリム・コミュニティを動揺させた。彼らはムスリム法が尊重されていないと感じた」(CPDD 2007:139)と記述する。そして、「イギリスがオランダの肩を持ったとして、裏切られたと感じたため、パダンにいたアミナの支持者は暴動を始めた。視界に入ったヨーロッパ人とユーラシアンが襲われた」(CPDD 2007:140)として、宗教と習慣への理解と尊重の欠如が「人種」対立を引きこしたとの論調で暴動を説明する。マリア・ヘルトフ事件に関しては、1999年教科書と大きな違いは見られない。

一方、1964年「人種」暴動の記述は簡潔化されていた。2007年教科書は、国内の「人種」間不和をUMNOの反PAPキャンペーンの流れの一部とする。PAP政府が暴動を沈静化しようとした努力や友好委員会について説明はされるものの、暴動自体に関しては合わせてわずか2段落分の分量にとどまった(CPDD 2007:190-191)。この教科書は「人種」暴動を教訓的な出来事としては描かなかつたのだ。

4-4 小結

2007年教科書は、1999年教科書の基本路線を踏襲するものであった。1999年教科書と同様に、多「人種」国家シンガポールを描き、「人種」内の多様性の記述はわずかに増加したのみであった。さらに、1999年教科書のような強いメッセージを持たない教科書でもあった。この教科書は民族的多様性が国家建設を困難にするとはみなさない。さらに、1964年「人種」暴動の記述も簡素化させ、教訓を与えるものとしては扱わない。それゆえ、民族的多様性は警戒し管理する対象だと認識が1999年教科書ほど強くは現れないのだ。

とはいえ、多民族国家の安定において他民族や他文化への理解が重要であるとのメッセージは継続して与えられている。マリア・ヘルトフ事件におけるイギリスの無理解と尊重の欠如は非難されるべきものであり、国内に混乱をもたらすものとして描かれた点は変化していないからだ。メッセージ性が弱く教訓を語らない2007年教科書においても、異文化への理解や尊重、そして寛容の重要性は引き続き示されたのである。この教科書の記述は、シンガポールにとって民族的多様性は強く恐れたり管理したりする対象ではなくなったとはいえ、潜在的には自国の安定への脅威であり続けていることを意味していよう。

5. 2014年・2015年教科書 *Singapore: The making of a Nation-State, 1300-1975*

5-1 シンガポールのはじまり

2014年教科書はシンガポール国外でも注目され、ニューヨーク・タイムスでも報道された(Peterson 2014)。シンガポールのはじまりの時期を1299年としたからだ。この年は、サン・ニラ・ウタマがシンガポールを「建国」したとされる年である(Blackburn and Wu 2019:154)。この教科書のサブタイトル(The Making of a Nation-State, 1300-1975)もまた、シンガポールがシンガプーラ期を自国の正式な歴史に組み込んだことを示している。

では、イギリス植民地以前のシンガポールはいかに描かれたのか。この教科書は、西暦800年ごろのボロブドゥールを描いた絵から始まる。そして、1100年代後半から1200年代前半のアンコール遺跡のレリーフの写真、そしてマレーシアのケランタンで見つかった古代の墓の写真を載せたうえで、これらの国々と同様にシンガポールにも長い歴史があったと伝える(CPDD 2014:4-6)。言い換えるならば、2014年教科書は、シンガポールを他の東南アジアの国々と同じく長い歴史を持つ東南アジアの一部と明確に位置付けたのである。

さらに、2014年版の教科書は東南アジアにおける古代から植民地期のシンガポールの交易の要所としての機能を強調した。1章(8-37ページ)及び2章(38-91ページ)で、交易に重点を置いて植民地化前のシンガポールの姿を描いたのだ。ここでは古代のシンガポールが重要な中継貿易地であったこと(CPDD 2014:59)、そして15世紀にはその重要性を失ったものの他国との交易は続いていたこと(CPDD 2014:73-76)が説明される。

その後、ポルトガルとオランダがシンガポールを手に入れるべく争っていたことも教えられる。さらに、この教科書は、ラッフルズのシンガポール上陸をヨーロッパ諸国の東南アジアでの勢力争いの中での一つの出来事として描く(CPDD 2014:73-82)。ここでは、建国の父としてのラッフルズの立場は強調されない。この教科書では、ラッフルズはシンガポールを利用しようとして訪れた外国人のうちの1人に過ぎないのである(Barr 2022:363)。

この教科書で、シンガポールはマレー世界の一員として存在感をもっていた過去を持ち、近世にはヨーロッパ列強の勢力争いに巻き込まれた東南アジアの一部として描かれる。歴史のはじまりだけでなく、自国の歴史的な位置づけにも変化が見られたのが2014年教科書であった。

5-2 CMIO内の多様性

2014年・2015年教科書は、その「はじまりの時期」の変化が注目されがちである。しかし実際は民族的多様性の記述にも大きな変化が見られる。CMIO内の多様性に関する記述が大幅に増加しているのである。以下、CMIO内の多様性についての記述を見ていこう。

2014年版も、以前の教科書と同様に植民地時代の人々の出身地を説明する。中国からの人々とインドからの人々についての記述は以前の教科書から変化していない。ヨーロッパから来た人々とアラビア半島からの人々に関する記述にはわずかな変化が見られるのみである。それぞれ、フランス出身者もいたとの記述とハドラモート出身だとの記述が追加されたのみであった(CPDD 2014:102)。

しかし、2014年教科書で注目すべきはマレー人に関する記述である。以前の教科書よりもマレー諸島からの人々を詳しく記述したのだ。「ジャワ人(ジャワから)、バウエアン人(バウエアン島から)、ブギス人(セレベスから)もまたシンガポールに来た」(CPDD 2014:103)としてジャワ人、バウエアン人、ブギス人の出身地が追加された。さらに、マレー諸島出身者について「ユーラシアンや海峡華人(チャイニーズ・プラナカンとしても知られる)、ジャウィ・ペカン(ジャウィ・プラナカンとしても知られる)、チッティ・マラッカ(プラナカン・インディアンとしても知られる)などの人々もいた」¹⁴(CPDD 2014:103)と以前の教科書が教えなかった集団をシンガポールの多様性の一部として明記したのだ。

「人種」内の多様性の記述はこれだけにとどまらない。2014年版は、1891年の国勢調査を引用して「人種」内の多様性を明示したのである。ここで、福建人や広東人、客家などの華人の中の方言集団および海峡華人など華人内のサブ・グループに加え、マレー人の中のブギス人、ジャワ人やジャウィ・ペカンなどの民族的多様性が示されている。インド人に関しても、ベンガル人やタミル、パールシーといったCMIO内の多様性が示された。さらに、その他の人々として、アラブ人のほかにアルメニア人やユダヤ人など少数ながらもシンガポール・コミュニティに大きな影響力を持っていた人々や日本人やタイ人も明記された国勢調査の結果を掲載したのだ(CPDD 2014:100)。この国勢調査のリストの掲載は、植民地シンガポールで民族的多様性が「公的」に認められていたことを子供達に教えたにとどまらない。植民地期シンガポールが世界中から人々が集まる都市であったことをも教えるものであった。

さらに、本文内でもCMIO内の多様性が詳しく説明される。華人に関しては、福建人、潮州人、広東人、海南人、客家、興化人の職業の違いをロー・カーセンの資料を引用して説明する(CPDD 2014:162)。インド人に関しては、シク教徒が警察官として働いていたことや銀行家として有名であったチェティアールについての記述だけでなく(CPDD 2014:149, 193)、南インドからのチュリアの説明も追加された(CPDD 2014:148)。また、3章と4章を含むユニット2の始まりに、ドービー・ゴート(MRTの駅)の由来を説明している。ドービーとはヒンディ語で洗濯夫を意味する。この教科書はインド人の中にドービーと呼ばれた集団がいたこと、そして彼らの存在は消えたのではなく、現代のMRTの駅名として残されていることを示したのだ(CPDD 2014:94-95)。

最も変化した点はマレー人内の民族的多様性についての記述である。2014年教科書では特にブギス人やジャワ人、バウエアン人が注目されていた。ブギス人とは、ヨーロッパ人が東南アジアを訪れる前から貿易商として存在感を放ち、交易のネットワークを持っていた人々である。オランダがインドネシア周辺を支配するようになると、多くのブギス人がシンガポールに移り住んだ(Turnbull 1989:14)。そのため、ラッフルズは彼らにカンポン・ブギスとして居住区画を与えていた。以前の教科書では、ブギス人居住区は地図の中の地名としてあげられたにすぎなかった。しかし、2014年教科書はこのブギス人居住区について、ラッフルズがブギス人のために与えたこと説明したのである(CPDD 2014:183)。

さらに、2014年教科書は、ジャワ人やバウエアン人が職を求めてシンガポールを訪れた

ことも説明する。中でも、オランダによる制限を逃れてジャワ人の出版関係者がシンガポールに移住したことが描かれた(CPDD 2014:130)。また、ジャワ人がメッカへの巡礼の途中にシンガポールを訪れ、旅費を稼いでいたことも記される。シンガポールはメッカへの巡礼の中継地であり、巡礼ブローカーも多くいたからだ(CPDD 2014:132, 182)。さらに、この教科書は、オラン・ラウトについても言及する。シンガポール川河口あたりで海上生活を送っていたオラン・ラウトをイギリスが現在のゲイラン・セライに移住させたことも書かれている(CPDD 2014:184)。

この教科書の民族的多様性の記述について興味深い点は、その他の人々のうち、現在は「外国人」とされている人々についての記述が追加された点である。この例が日本からの「からゆきさん」であった。植民地時代のシンガポールでは相当数の日本人女性が「からゆきさん」として働いていた。ワレンの調査によると、1887年の段階で既に100人以上のからゆきさんがいた。更に20世紀初頭には600人以上の「からゆきさん」がシンガポールで働いていたという(ワレン 2015: 52-53)。彼女らもまた当時のシンガポール社会を構成する要素であった。この教科書では、1930年代以前のシンガポールの男女比が男性に偏っていたこと、そして女性のうちの相当数が「からゆきさん」と広東からの「フラワー・ガール」であったこと、その一方で売春ではなく肉体労働に従事した広東人女性(サムスイ・ウーマン)もいたことが Learn More About It というコラムで記されている(CPDD 2014:167)。

この教科書は、シンガポールの民族的多様性を CMIO の枠組みに限定しない。CMIO 内の多様性についても積極的に記述し、特にマレー人やその他の内部の民族的多様性を描くことで、より民族的に豊かな多様性を持つシンガポールの姿を描いたのである。これらの人々の記述を通して描かれたのは、様々な人々が世界中から集まる交易と交通のハブとしてのシンガポールの姿—つまり、グローバル・シティとしてのシンガポールの姿であった。

5-3 マリア・ヘルトフ事件、1964年「人種」暴動

2015年教科書のマリア・ヘルトフ事件に関する記述は、2007年教科書よりも更に簡潔になった。2015年版では、以前の教科書のようにマリアの結婚については言及されない。イギリスの裁判所がマリアを修道院に送るよう決定したとのみ記述される(CPDD 2015:49)。それゆえ、以前の教科書のようなイギリスがイスラム法を軽視したとイスラム教徒が感じたとは書かれない。この教科書は、マリア・ヘルトフ事件をあくまでも養育権争いであり、イギリスの不公平さによって起こされたとする。そして、その結果を「一部のムスリムは、最高裁の決定に対して怒りを覚えた。彼らは、イギリスは不公平でオランダ人の肩を持っていると感じた。暴動が起こり、暴動の参加者はヨーロッパ人とユーラシアンを襲いはじめた」(CPDD2015:50)とする。この教科書は、マリア・ヘルトフ事件を宗教や文化の無理解というよりも、植民地政府と植民地の関係の中でのイギリスに対する不満の一例として扱ったのだ。

もっとも大きな変化が見られたものは、1964年の「人種」暴動である。2015年教科書では、「人種」暴動は UMNO と PAP の関係悪化の流れの一部として扱われる。暴動それ自体

についても、6月と9月の暴動がそれぞれ1段落で語られたのみであった。さらに、2015年教科書では友好委員会についての記述は削除された(CPDD 2015:111)。2015年教科書における「人種」暴動は、国内問題としての「人種」対立というよりも、外国からの影響により国内が混乱した例として描かれたのだ。

1999年と2007年の教科書は、程度の差はあれど、民族的多様性を「危険なもの」とみなしていた。だからこそ、1999年教科書はマリア・ヘルトフ事件と1964年「人種」暴動を教訓として扱い、2007年教科書は両事件を通して寛容と相互理解の重要性を伝えていた。しかし、本教科書は、マリア・ヘルトフ事件も「人種」暴動も、潜在的脅威としての民族的多様性を教える道具としては扱わない。2015年教科書の記述は、警戒し管理する対象として民族的多様性を描きはしなかったのだ。これらの事件の扱い方の変化は、シンガポール政府の民族的多様性に対する認識・評価の変化をあらわしているといえよう。

5-4 小結

2014年・2015年教科書の民族的多様性についての描き方は、以前の教科書とは大きく異なる。まず「人種」間不和の危険性を象徴していたマリア・ヘルトフ事件と「人種」暴動は、もはやその役を与えられていない。多民族国家の政府は公平で公正であるべき、そして多様な人々は平等に扱われるべきとのメッセージが伝えられるのみである。ここに、PAPの民族的多様性への認識・評価の変化が現れている。すなわち、1999年教科書作成の段階に比べると、2015年教科書作成段階のPAPは国内の民族的多様性を過度に恐れてはおらず、CMIOの不和も過度には警戒してはいなかったということだろう。

2つ目に、2014年・2015年教科書はシンガポールをCMIOの4分類を越える多様性を持つ国として描いた。この豊かな多様性は否定的には描かれない。むしろ、交易の中心だったからこそさまざまな人々がシンガポールに惹きつけられ、そして外国から移住してきた彼らの貢献によってシンガポールが更に発展したという、シンガポールの繁栄の象徴として描かれる。ここでは、シンガポールの豊かな民族的多様性は誇りであり、恐れるべき対象というよりも発展のための資源であるとのメッセージが与えられているのである。

(特に能力のある)人々のシンガポールへの移住がシンガポールの発展を支えたとの論調が顕著に見られるのは、ブギス人についての記述であろう。ブギス人は商売を通してアラブ人やインド人商人たちと強いつながりをもっていた。それゆえ、この教科書は、アラブ人やインド人、ジャウィ・プラナカンなどの商人たちをシンガポールに惹きつける存在としてブギス人を描く(CPDD 2014:126)。生徒たちは、既にネットワークを築いていたブギス人がシンガポールに移住したことで、他の商人たちもシンガポールに惹き付けられたと教えられる。

このブギス人についての記述は、現代シンガポールへの示唆に他ならない。シンガポールは外国人高度人材¹⁵の誘致に力を入れている国家である。特にシンガポールの方向性についての報告書として1999年に出された『シンガポール 21』では、外国人高度人材について「能力のある人の集まりは能力のある人を呼ぶ(The pool of talent will be a natural

magnet to more talent)」（Singapore 21 Committee 1999:20）と表現している。アラブ人商人やインド人商人とのつながりを持つブギス人は、まさに植民地シンガポールにとってシンガポールの発展に貢献する人々（商人）を惹きつける存在（natural magnet）であったのだ。ブギス人についての記述は、高度人材をシンガポールに惹き付けることの効果を歴史教育を通して子供達に教えるために使われているといえる。

6. おわりに

本稿では、1999年教科書から2014年・2015年教科書において、多民族国家としてのシンガポールがいかにか描かれてきたか明らかにしようと試みた。1999年教科書では、民族的多様性は潜在的に危険なものであるととらえられ、シンガポールの民族的多様性もCMIOの4つに限定されて記述されていた。多民族国家というよりも、多「人種」国家としてのシンガポールが描かれていたのである。しかし、2007年教科書のわずかな変化を経て、2014年・2015年教科書では描かれたシンガポール像は全く異なるものとなった。この教科書では、民族的多様性は潜在的に危険なものではなく、発展のための資源として描かれたのだ。それゆえ、CMIO内の多様性も細かに記述されている。まさに、多民族国家としてのシンガポールが描かれていたのだ。

この変化は「歴史の見直し」に他ならない。シンガポールは開かれた国家であることを追求してきた。それに伴い、外国人も多く受け入れてきた。外国人の増加は必然的に民族的多様性の増大ももたらす。この流れの中で、シンガポールではセコンダリー・スクールの歴史教科書における「歴史の見直し」が起こっている。自国の歴史を14世紀にまでさかのぼって教えるようになったことも「歴史の見直し」の動きの1つである。しかし、この「歴史の見直し」は始まりの時期に限られない。自国の歴史の位置づけにも「歴史の見直し」の影響がある。2014年・2015年版はシンガポールの歴史をグローバルな文脈の中に位置づけて描いた。それはまさにグローバル・シティとしてのシンガポールのイメージに合ったものだった(Blackburn and Wu 2019:155)。そして更に自国の多様性の記述、すなわち多民族国家としての自国像にも「歴史の見直し」の影響が見られる。

この多様性に関する「歴史の見直し」には、過去の脱却と未来への指針の提示という2つの役割が見いだせる。1点目の過去の脱却とはシンガポールにおける精神的な意味での「脱マレーシア化」である。Blackburn and Wu (2019:154)は、シンガプーラ時代の記述が増えたことは脱植民地化の動きであるとする。しかし、同時に、これは脱マレーシア化の動きでもあろう。Barr (2022)やAbudllar (2017)はシンガポールの教科書は、マレー性を希薄化させようとしてきたという。特にBarr (2022:351)は、マレー性の希薄化の背景には国内のマレー人の勢力が活気づくことに対するPAPの懸念があったとする。

しかし、PAPがマレー人を「恐れた」のは国内事情だけによるものではないと考えられる。PAPはマレー人を通して見え隠れするマレーシアをも懸念していたのだ。人々を等しく移民として扱う描写は独立直後の教科書から続けて見られたものであった。この人々を等しく移民とみなす姿勢の背後には、すべての「人種」を平等に扱うというPAPの哲学が

ある(Blackburn and Wu 2019:139-140)。「人種」の平等は、マレー人優遇を主張する UMNO に対して、マレーシアからの分離独立前から PAP が主張しているものである。この「人種」の平等の強調は、プミプトラ政策を行うマレーシアと自国を差別化する意図があると考えられている(奥村 2002:32)。それゆえ、シンガポールの教科書は、自国がマレーシアとは異なる国家であるとの意味で 1819 年以降のイギリス植民地からはじまるシンガポールを強調し、移民の子孫として等しく CMIO を描いてきたのである。

しかし、2014 年の教科書は、マレー世界の中のシンガポールを描き、マレー人についての記述も大幅に増やした。そして、中継貿易地として繁栄し、多様な人々が訪れたシンガポールの姿を見せる。ここには国内のマレー性やマレーシアを懸念するシンガポールの姿はない。2014 年の教科書でマレー世界の中のシンガポールを描いたことは、もはやマレーシアに対する以前のような自意識が薄くなったことのあらわれと言えるだろう。すなわち、精神的な意味での「脱マレーシア化」の一端である

未来への指針の提示は、過去との脱却とも関連するが、民族的多様性への評価の変化に現れている。1999 年の段階では、民族的多様性は、警戒し、監視し、管理すべき潜在的脅威であった。しかし、過渡期としての 2007 年教科書を経て、2014 年・2015 年教科書は民族的多様性の記述を一変させた。2015 年教科書はマリア・ヘルトフ事件と「人種」暴動を潜在的脅威の象徴としては描かなかった。さらに 2014 年教科書は、植民地時代の民族的多様性についての記述を大幅に増加させた。CMI 内の多様性に加えて、O の多様性、そして現在は「外国人」とされる植民地時代の「出稼ぎ」の人々も記述したのである。これらの人々からなる多様性は否定的には書かれない。2014 年教科書は、世界中から様々な人々が様々な目的で訪れていて、それらの人々によって発展してきた都市としてシンガポールを描く。まさに現代シンガポールが求めるグローバル・シティとして植民地シンガポールを描いたのである。

2014 年教科書が作られるわずか 1 年前、シンガポールでは移民増加に反対するデモが起きていた。シンガポール政府は移民をより受け入れる方針を示していたが、国民の中にはそれに反対する声も根強かったのだ。しかし、シンガポールが生き残るには、人々も集まるグローバル・シティとしての姿を追求するしかない。そのためには対外的にグローバル・シティであることを宣伝するだけでなく、国内に向けても自国がグローバル・シティであることを教え込み、国民をグローバル・シティとしてのシンガポールに適応させなければならない。歴史教育はその新たな自国像を国民に教え込むためにも使われたのである。

2014 年・2015 年の教科書は、現在のシンガポールの姿が実は昔からのシンガポールの「伝統」なのだと強調して、グローバル化の進むシンガポールに正統性を持たせる試みである。この教科書は、シンガポール政府が望み、そして推進したグローバル・シティ化したシンガポールと、その結果としての民族的多様性の増大を国民に受け入れさせるための一つの方策だと言えよう。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP 20K20042 の助成を受けて行われたものである

参考文献

- Abdullah, Walid Jumblatt (2017) "Selective history and hegemony-making: The case of Singapore", *International Political Science Review*, pp.1-14, DOI: 10.1177/0192512116677305
- Barr, Michael D. (2018) *Singapore: A Modern History*, London: Bloomsbury Academic.
- (2022) "Singapore Comes to Terms with its Malay Past: The Politics of Crafting a National History", *Asian Studies Review*, 46(2), pp.350-368.
- Blackburn, Kevin and ZongLun Wu (2019) *Decolonizing the History Curriculum in Malaysia and Singapore*, New York: Routledge.
- Chang, Tou Chuang (1997) "From "Instant Asia" to "Multi-Faceted Jewel" - Urban Imaging Strategies and Tourism Development in Singapore", *Urban Geography*, 18(6), pp.542-562.
- Chia, Yeow-Tong (2015) *Education, Culture and the Singapore Developmental State, - "World- Soul" Lost and Regained ?*, Hampshire: Palgrave Macmillan.
- Colony of Singapore (1951) *Report of the Singapore riots inquiry commission together with a despatch from his excellency of the governor of Singapore to the Right Honourable the Secretary of State for the Colonies*, Colony of Singapore.
- Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education (1999) *Understanding Our Past- Singapore - from Colony to Nation*, Singapore: Federal Publications.
- (2007) *Singapore -From Settlement to Nation - Pre-1819 to 1971*, Singapore: EPB Pan Pacific.
- (2014) *Singapore: The Making of a Nation-State, 1300-1975, Secondary One*, Singapore: Star Publishing.
- (2015) *Singapore: The Making of a Nation-State, 1300-1975, Secondary Two*, Singapore: Star Publishing.
- Department of Statistics, Singapore (2021a) *Singapore Census of Population 2020, Statistical Release 1: Demographic Characteristics, Education, Language and Religion*, <https://www.singstat.gov.sg/-/media/files/publications/cop2020/sr1/cop2020sr1.ashx>
2022年7月30日アクセス
- (2021b) *Singapore Census of Population 2020: Administrative Report*, <https://www.singstat.gov.sg/-/media/files/publications/cop2020/admin/cop2020admin.ashx>
2022年12月23日アクセス

- Drysdale, John (1984=1996) *Singapore: Struggle for Success*, Singapore: Times Books International.
- Henderson, Joan (2018) “Culture, Heritage and Tourism: The Promotion of Singapore in the 1970s”, (ed.) Terence Chong, *The State & the Arts in Singapore*, Singapore: World Scientific, pp.51-66.
- Hirschman, Charles (1987) “The meaning and measurement of ethnicity in Malaysia: An Analysis of Census Classifications”, *The Journal of Asian Studies*, 46(3), pp.555-582.
- Kwa, Chong Guan, Derek Heng, Peter Borschberg and Tan Tai Yong (2019) *Seven Hundred Years- A history of Singapore*, Singapore: National Library Board.
- Lee, Michael H. (2015) “Globalisation and History Education in Singapore”, (ed.) Joseph Zajda, *Nation-Building and History Education in a Global Culture*, New York and London: Springer, pp.131-153.
- Leyden, John (1821) *Malay annals: translated from the Malay language, by the late Dr. John Leyden. with an introduction, by Sir Thomas Stamford Raffles*, London: Longman, Hurst, Rees, Orme and Brown.
- Peterson, Jane A. (2014) “In New Textbook, the Story of Singapore Begins 500 Years Earlier”, *The New York Times*, May 11, 2014.
- PuruShotam, Nirmala (1998) “Disciplining Difference- Race in Singapore”, (ed.) Joel S. Kahn, *Southeast Asian Identities – Culture and the Politics of Representation in Indonesia, Malaysia, Singapore, and Thailand*, Singapore: ISEAS, pp.51-94.
- Singapore 21 Committee (1999) *Summary of the Deliberations of the Subject Committee on Attracting Talent VS Looking After Singapore*, Singapore: Singapore 21 Committee.
- Turnbull, Constance Mary (1989) *A History of Singapore 1819-1988, Second Edition*, Singapore: Oxford University Press.
- (2009) *A History of Modern Singapore 1819-2005*, Singapore: NUS Press.
- 奥村みさ (2002) 『「他者」を包摂する歴史の創造—シンガポール人三世代による歴史記述を読む』『国際英語学部紀要』第2号 25—41頁。
- 坂口可奈 (2017) 『シンガポールの奇跡 - 発展の秘訣と新たな課題』早稲田大学出版部。
- ワレン、ジェームズ・フランシス著 蔡史君・早瀬晋三 監訳、藤沢邦子 訳 (2015) 『阿姑とからゆきさん シンガポールの売買春社会 1870—1940年』法政大学出版局 (= (2003) *Ah Ku and Karayuki-san, Prostitution in Singapore 1870-1940*, Singapore: Singapore University Press)。
- シンガポール観光局 日本語版(2022) 多彩な表情
https://www.visitsingapore.com/ja_jp/travel-guide-tips/about-singapore/people-of-singapore/
2022年6月23日アクセス

1 ここで、シンガポールにおける華人、マレー人、インド人、その他との呼称について説明したい。国勢調査では、華人とは中国にルーツを持つ人々、マレー人とはマレーやインドネシアにルーツを持つ人々、インド人とはインドやパキスタンやバングラディシュ、そしてスリランカにルーツを持つ人々とされている。その他は華人、マレー人、インド人以外の人々を意味する (DOS 2021b:152)。一般的にある国の人々を示す場合に～人との語が使われるが、シンガポール研究の日本語文献ではシンガポール国内の CMIO を示す場合にも～人との後が使用されている。もちろん、マレー系やインド系との語を使用する研究者もいる。

2 シンガポール研究における race の訳語には、種族、民族、人種、「人種」がある。論者によって訳語は異なるが、本稿では「」をつけて「人種」とする。

3 マンダリンとは、標準中国語を意味する。シンガポールの文脈では華語と訳される場合もある。

4 子供達は教科として自分達の母語とされる言語を学ぶが、基本的には英語で教育を受ける。

5 シンガポールの教育システムは非常に複雑であり、日本のように小学校、中学校、高校、大学や専門学校と単純に区分するのは難しい。ほとんどの生徒たちはプライマリー・スクール (日本の小学校にあたる教育機関) 卒業後にセコンダリー・スクールに進学するため、セコンダリー・スクールは日本の中学校にあたるものといえる。しかしながら、シンガポールのセコンダリー・スクールでは、個人によって修学年数や履修コースが異なる。そのため、かならずしも日本の中学校の概念をそのまま当てはめられるわけではないことに留意されたい。

6セコンダリー・スクール卒業後の進路は生徒によって異なり、大学入学準備のためのジュニア・カレッジに進学する生徒もいれば、技術教育校やポリテクニクに進む生徒もいる。

7 2014年・2015年教科書には、シンガポール国家図書館局 (National Library Board) 発行のウェブ辞書の URL が記載されている。そのウェブ辞書にアクセスすることで、生徒たちは歴史的出来事や場所、教科書に取り上げられた人々についてより詳細に学ぶことができる。しかし、本稿ではあくまでも教科書内の記述を分析対象とする。

8 戦中のシンガポールには日本軍の占領により、学業の継続を諦めざるを得なかった学生がいた。彼らは戦後になってから学校に戻ったため、徴兵年齢に達していた。

9 ユーラシアン (Eurasian) とは、ヨーロッパ人と現地の人々の間に生まれた混血の人々及びその子孫を意味する。プラナカン (Peranakan) とは、イギリス植民地期以前のマラヤに移住した華人と現地のマレー系の人々との間に生まれた混血の人々の子孫のことを意味する。

10 26頁の本文では Straits Chinese (海峡華人) との語が使用されるが、「Did you know?」と題されるコラムで、「海峡華人は「プラナカン」としても知られる」と紹介されている (CPDD 1999:26)。

11 本教科書は、この部分の出典を “Adapted quotation of Lee Kuan Yew in Singapore: Struggle for Success by John Drysdale” とする。しかし、ドリスデールの著書 (Drysdale 1984=1996: 363) での当該記述は、Straits Times 紙の 1964年8月1日の記事 Lee calls for check on extremists who spout hate からの引用であった。

12 なお、この教科書は 1950年代暴動をも「人種」問題と結び付けて教える。1950年代のシンガポールでは、ホック・リー・バス暴動などの共産主義者に主導されたストライキや暴動が相次いでいた 1954年と 1956年の暴動は学生達に直接関わるものであった。一方、一見すると無関係のホック・リー・バス暴動に彼らが参加した背景には、マンダリン教育を受けた人々のキャリアや教育の制限がある。植民地時代のシンガポールでは、マンダリンでの高等教育機関は設置されていなかったため、マンダリンで高等教育を受けるためには中国に留学するしかなかった。しかしながら、それは「一方通行」の旅であったとされる (Turnbull 2009:249)。植民地政府は、中国で教育を受けた学生がシンガポールに戻ることを禁じていたからである。更に、マンダリン教育を受けた学生がシンガポールで高給の職に就くことは難しかった。いわばマンダリン教育を受けた華人学生にとって労働問題は自身にも直結するものであった。だからこそ、学生たちはバスの運転手との団結を示したのだ (Barr 2018:196)。この教科書は、暴動の背景にはイギリス植民地政府の教育言語による差別によってマンダリン教育を受けた華人が困窮していたこと、そしてそれゆえの反英感情があると説明する (CPDD 1999: 135)。

13 しかし、ブギスとチェティアールについての説明はなされなかった。

14 ジャウィ・プラナカンはイスラム教徒のインド人とマレー人の子孫である。

15 シンガポールでは Foreign Talent と呼ばれる。